

文献紹介

海外舞踊文献紹介(舞踏研究編)

國吉 和子

外国における舞踏研究は、1980年代後半、舞踏が海外に進出した時期とほとんど同時に、欧米を中心として始まっている。本稿ではこれまでに発表された論考から、出版・発行されたものに限定して紹介する。

モノグラフで著わされた最初の本はドイツで出版された。

Haetdter, Michael & kawai, Sumie, edit.:

Butoh- Die Rebellion des Körpers Butoh—Ein Tanz aus Japan. Kunstlerhaus Bethanien Berlin, 1986

日本のモダンダンス史を踏まえ、写真とともに各舞踏家別に紹介したもので、インタビューとエッセイ、和文評論の翻訳等で構成されている。

同じ年にはアメリカの演劇誌 TDR (R. Schechner, edit. T110, Summer) でも舞踏特集が生まれ、Bonnie Steinのエッセイとともにジャーナリスト的な視点からの舞踏の享受がレポートされている。同じ号ではP. バウシュのタンツテアターも同時に特集されていて、当時、広く注目されていた二種のダンスを時機を得て取り上げた編集となっている。

Susan Blakey Klein, Ankoku Buto; *The*

Premodern and Postmodern Influences on the Dance of Utter Darkness. Cornell Univ. Press N.Y. 1988

これはコーネル大学に提出された同名の博士論文を発表年に出版したもので、海外の舞踏研究の先鞭をつけたといえるもの。舞踏に見られる特徴的な形について、実際の舞踏の舞台を分析しながら跡付けている。このアプローチはその後の外国人による舞踏研究に踏襲されることとなるが、欧米のジャーナリズムが専らドイツ、アメリカの現代舞踊との関係から紹介していた舞踏を、その成立から展開までを日本の戦後史のなかで歴史的に考察、土方巽死去直後の関係者、舞踏家や批評家へのインタビューや日本語評論の英訳などが掲載されており、続く舞踏研究者に役立つ資料となった。

舞踏紹介の基本的な情報の収集が一段落する時期が1990年代初期で、この時期はまた舞踏を豊富な写真と短いエッセイとともに構成した写真集の出版が相次いだ時期でもあった。その後、1990年代半ば頃になると、日本の戦後芸術思潮史研究の観点から広く舞踏を位置づける論考が発表される

ようになった。

Alexandra Munroe, *Revolt of the Flesh: Ankoku Butoh and Obsessional Art, Japanese Arts after 1945, 1994)*

ムンローはニューヨーク、グッゲンハイム美術館のゲストキュレーターとして、このScream against the sky展を担当、そのカタログに掲載したのがこの論考である。展覧会は、日本の戦後前衛芸術を、その文化的、社会的背景と関連づけながら、それまで欧米の摸倣と見られがちだった視点を批判し、そのオリジナリティを浮き彫りにし注目された。この論考で彼女は土方の暗黒舞踏を、個人の精神の傷や社会的危機に遭遇した特異な感覚に基づくオブセッションナルアートのひとつとして、西欧的ヒューマニズムと二元論を拒絶した試みとして位置づけている。

2000年に舞踊学会大会でのゲスト講演者として招聘したWilliam Marotti (UCLA) も、舞踏を戦後日本の前衛芸術史の文脈からとらえ、舞踏の享受に批判的な論考を行なっている。

1990年代後半には、舞踏関係の図書は、英仏独のほかにポルトガル語、イタリア語、ハンゲルなどの言語による出版がみられたが、特にパリで出版された

Odette Aslan (edit.), *BUTÔ (S)* (Paris, CNRS EDITIONS, 2002)

17名の執筆者(英米仏日)による論文をO. アスランが編集した380余頁におよぶ一冊となった。演劇研究家である編者はアルトーからグロトフスキーの研究を経て、ピナ・バウシュと舞踏に焦点を絞り、欧米における舞踏の影響について考察を重ねてきた。舞踏を戦後日本の文化的背景の反映として位置づけ、舞踏のルーツを断定することなく、複数の要素の相互影響を並列して語っている。膨大な資料を詳細に分析したアスランによる総論を軸に、舞踏研究の現在を知ることができる。本体は六章から成り、「アヴァンギャルドと舞踏」では、戦前戦後の日本の前衛を舞踊から演劇まで概観したアスランの文と、*Fault Lines - Cultural Memory and Japanese Surrealism* (Stanford, Stanford University Press, 1999) という著作をすでに発表しているMyriam Sasの論考では、舞踏を戦後日本のシュルレアリズム運動の展開としてとらえている。「舞踏の系譜とアウトサイダー達」には、1960年代の土方を再考察した國吉の論考、玉三郎と大野一雄を論じたGeorges Banuのほか、舞踏の第一世代から第二世代、そして田中泯らを対象としたエッセイが掲載されている。「美学とテクニク」ではYvonne Ténenbaumによるカルロッタ・池田論、Anne Gossotがネオダダの美

術家と舞踏との関わりについてのリサーチ、「東北歌舞伎」の章では、土方巽の1972年作品より「疱瘡譚」の作品分析を、Jorge Gayon, Alix de Morant, 栗原奈名子の三人三様の論考をあわせて掲載していて興味深い。「シアターダンス」にはフランスで活躍する日本人舞踏家について、「土方以後」ではアメリカ、ドイツで活躍する舞踏家や身体気象のワークショップからロシアのデレヴォまで論じ、日本ではあまり知られていない舞踏家の存在を、土方巽に始る暗黒舞踏のさまざまな展開として捉えている。巻末には年表と参考図書、映像リストを付して完璧な一冊となっている。

さて、外国の研究者にとって日本語の壁は厚く、特に土方巽の言説には日本人でさえ難解な言葉を理解しなければならない。しかし以前に比べると、舞踏に関する言説の翻訳が少しずつだが発表され、その研究成果が現われるようになった。特に土方巽の言葉の翻訳が、部分的なものではなくある程度まとまった長さのものが、2000年になってからようやく発表されるようになり、舞踏研究を刺激することとなった。

Kurihara Nanako (Guest edit.), *Hijikata Tatsumi - The words of Butoh* (NY, TDR T165, Spring 2000)

ここに訳出(翻訳=Jacqueline S. Ruyak, Kurihara Nanako.)された文章は「中の素材/素材」など1960年代初期のものから、最後の講演記録まで全7種、エッセイや語り、舞踏ノートの書き込みまで、ポイントを押さえた選択となっている。栗原自身による論考「Hijikata Tatsumi--The Words of Butoh」を巻頭にかかげ、訳出文の解説をかねて、土方の言葉の特殊性について書いている。以後、外国人による土方論考ではこのTDRからの引用が多く見られるようになった。

John Barrett (trans.), *Kazuo Ohno's world - from without & within* (Middletown, Wesleyan University Press, 2004)

大野一雄研究に不可欠となった翻訳本。既刊の「大野一雄 魂の糧」(1999年)と「大野一雄 稽古の言葉」(1997年、いずれもフィルムアート社刊)のほぼ全訳で、言葉の背景についての詳細は巻末註で補っている。

Sondra Fraleigh, Tamah Nakamura, *Hijikata Tatsumi and Ohno Kazuo* (NY, Routledge, 2006)

学生のためのリーダーとして編集された一冊。これまで発表された資料を偏りなくまとめ、舞踏の成立から現在までをたどり、最近のインタビューと舞踏ワークショップ参加レポート、用語

リスト、参考文献一覧付きという親切的な編集となっている。

Stephen Barber, *HIJIKATA: REVOLT OF THE BODY* (UK, Creation Books, 2006)

A. アルトーの研究者として知られるバーバによる土方巽論考である。副題に「肉体の叛乱」と付しているように、1960年代の土方の暗黒舞踏をサド侯爵からJ. ジュネへ至るヨーロッパ異端文学、そして三島由紀夫文学との地下茎が示唆されている。同書では土方の死から書き起こし、時間を戻して上京前後の様子から没するまでを、代表作をとおして概観している。特に、1960年代の記述が充実しており、1960年代以降も土方が幼児期の体験に対する郷愁を抱いていたことなど、ジュネの小説からの影響が見られるという指摘や、土方が晩年アルトーへのオマージュを再燃させていたことなど、興味深い視点が示されている。

また、TDR誌に掲載された論考だが、Christine Greiner, *Researching Dance in the Wild* (NY, TDR T195, Fall 2007)

グレイナー(サンパウロ・カソリック大学身体言語学部教授)の論考はTDR誌が2006~2007年の3回にわたって特集(Guest editor: André Lepecki)した“Dance Composes/Philosophy Composes Dance”に寄せられたもの。グレイナーは身体研究のひとつとして、これまで舞踏についての著作もある(*Buto—pensamento em evolução*「舞踏——進化の思想」Escrituras, São Paulo, 1998年)が、今回の論考では身体が環境との相互作用をとおしてどのように外部を認識してゆくか、また身体がどのように変化してゆくのかというプロセスを、ブラジルの新しいダンス表現をとおして論じている。特に舞踏について語っているわけではないが、パフォーマンスアートにも重なる身体領域を認知科学の視点から示唆していて、舞踏研究の学際的な展開として注目したい。付言だが、彼女の論考の中で紹介されたClarice Lispectorの小説が、この7月に発表された山田せつ子ダンス作品のテキストに使われていたことも興味深い交差である。

イタリアでは、Maria Pia D'Orazi, *KAZUO ÔNO* (L'EPOS, Palermo 2001)、同著者による *Il corpo eretico* (CasadeiLibri, Padova 2008) では、映像や最新のインタビューをもとに土方巽の暗黒舞踏を論考し、土方が提起した問題意識を今日の消費社会において身体が直面する危機への警告として位置づけている。このほか、ローマ大学が2001年に開催した舞踏シンポジウムの記録集 Giorgio Salerno (edit.), *RITORNO A HIJIKATA* (Bulzoni Editore, 2007) など。

文献紹介

韓国舞踊学論文の研究動向

—博士論文を中心に—

早稲田大学演劇博物館客員研究助手 崔 柄珠

はじめに

日本では想像できないことであろうが、現在韓国には11の国立大学、37の私立大学、6の短期大学、合わせて54校にも上る大学に舞踊学科が設置されている。そのきっかけとなったのは、新設大学の急増に伴う質の低下を懸念した当時の朴正熙政権が1961年に打ち出した「教育に関する臨時特例法」である。この法律に呼応すべく各大学は特徴ある教養科目の開設に向かった。梨花女子大学では、キリスト教精神を反映する教養科目の開設と共に1963年韓国で初めて体育学部で舞踊学科を新設した。この梨花女子大学の舞踊学科新設に感化され他の大学も次々と舞踊学科を開設していった。しかし、梨花女子大学と同様すべての大学で体育学部内に舞踊学科が開設されたことで（90年代末頃から芸術学部へ舞踊学科を移転させる大学もあるが）実技に重きが置かれ理論が軽視される傾向へと向かったのはある意味当然の成り行きであったであろう。

このように韓国においては、大学の舞踊学科は研究者より舞踊家の育成に力を入れていたのにもかかわらず、2000年代に入り博士学位取得者が急増していることを知り、私としてはこの現象は理解しがたくその背景を一度調べてみたいと思立った。

したがって、本稿では韓国の舞踊学研究の動向について考察したいと思う。そのため、主にソウルにある国立中央図書館と国会図書館に所蔵されている舞踊に関する修士論文と博士論文を対象にインターネット電子図書館を利用してデータベース化された資料の検索を行うことにした。

まず、検索の対象期間を初の修士論文が発行された1960年から2007年までとした。その結果、国立中央図書館では4137件、国会図書館では2960件が検索され、その内両者に重複する論文を調整すると、4534件となった。そしてその内訳は、修士論文が4260件、博士論文が274件であった。さらにそれらを年代別に見ると、修士論文は、1960年代（1960-1969）が最初の修士論文である梨花女子大学発行の『民俗舞踊小考：—韓国・アメリカを中心に—』（李賢淑）を始め10件、1970年代（1970-1979）が76件、1980年代（1980-1989）が486件、1990年代（1990-1999）が1422件、2000年代（2000-2007）が2539件であった。また、1986年から始まる博士論文は、1999年まで（1986-1999:

以後前期と云う）が61件、2000年代（2000-2007：以後後期と云う）が213件であった。

本稿では、対象を274件の舞踊博士論文に限定し、年代別・大学別・研究分野別という3つの視点から分類を試みた。資料としては、各々の舞踊博士論文の中の「論文概要」と「研究方法」に焦点を絞って用いた。

1. 年代別分類

年代別に分類すると以下のものである（表1参照）。

韓国における初の舞踊博士論文は、アメリカモダンダンスを韓国に普及させた陸完順の『Rudolf von Labanに関する研究—Human Movementを中心に—』（1986、漢陽大学）である。その後少し間があいて1990年に1件、その翌年からは毎年博士論文が発行されほぼ右肩上がりに件数は増大していき、最近では年数十件にまで達している。

そして前述のようにこれを前期と後期に区分すると、前期が総件数61だったのに対し、後期がわずか8年で213件と前者の3.5倍にもなっている。特に2004年から2007年までの4年間だけで154件と全体の56%にも及ぶ。

【表 1】韓国舞踊博士論文の年代別分類

（崔柄珠 作成）

年代別	件数	年別	件数
1980年代	1	1986年	1
1990年代	60	1990年	1
		1991年	2
		1992年	3
		1993年	2
		1994年	3
		1995年	5
		1996年	7
		1997年	12
		1998年	9
		1999年	16
2000年代	213	2000年	11
		2001年	15
		2002年	13
		2003年	20
		2004年	32
		2005年	34
		2006年	44
		2007年	44
合計	274		274

2. 大学別分類

「大学別分類」を行った結果、舞踊博士論文は42大学で出されていることが判明した(表2参照)。さらには、以下の3つの大学(群)の兆候に注目した。

まず、注目した第一点目は檀國大学、同徳女子大学、成均館大学、圓光大学、世宗大学、龍仁大学の6校についてである。前述の年代別分類でも述べているように博士論文の数が後期に急増しているが、その原動力になっているのはこの6校である。この6校については前期の合計が檀國大学の4件を含めてわずか5件であるのに対し、後期が71件と全体の3分の1を占めている。この背景にあるのはこの6校いずれにも後期に舞踊学科博士課程ができたことである。前期においてはいずれの大学にも博士課程は無かったが、2000年以降

順次9大学に舞踊学博士過程が開設され、今後も舞踊学科博士課程の開設とその論文の数は増え続けるものと予測できる。

次に、注目したのは梨花女子大学である。ここはどの大学よりも魁て舞踊学科及び博士課程を開設しており、韓国舞踊界において最強の学閥を誇っているにもかかわらず前期においてもわずか7件と決して多くはないばかりか後期になるとわずか3件と半減している。不思議な現象だ。

そして最後は、ソウル大学(6件、体育教育学科)、延世大学(4件、社会体育学科)、高麗大学(2件、体育学科)などの大学である。これらの大学にはいずれも舞踊学科そのものが開設されていないにもかかわらず舞踊をテーマとする博士論文が見受けられるという点である。

【表 2】韓国舞踊博士論文の大学別分類

(崔柄珠 作成)

順	大学名	体育学・舞踊学の博士課程開設年度	86年-99年	00年-07年	総件数
1	漢陽大学	1981年/2001年	19	23	42
2	檀國大学	1989年/2001年	4	21	25
3	同徳女子大学	年度不明/2003年	0	21	21
4	慶熙大学	1980年/2003年	6	11	17
5	京畿大学	1980年/なし	6	10	16
6	成均館大学	1988年/2000年	1	15	16
7	圓光大学	1991年/2001年	1	10	11
8	明知大学	1984年/なし	5	6	11
9	梨花女子大学	1981年/2000年	7	3	10
10	世宗大学	年度不明/00年以降	0	9	9
11	韓国体育大学	1987年/なし	1	7	8
12	中央大学	1990年/なし	0	7	7
13	建國大学	年度不明/なし	3	3	6
14	ソウル大学(学部・修士に舞踊学科なし)	1982年/なし	0	6	6
15	釜山大学	1988年/なし	4	2	6
16	全南大学	1995年/なし	0	5	5
17	嶺南大学	1989年/なし	1	4	5
18	龍仁大学	1997年/00年以降	0	5	5
19	啓明大学	1996年/なし	0	4	4
20	國民大学	1984年/なし	0	4	4
21	延世大学(学部・修士に舞踊学科なし)	1983年/なし	0	4	4
22	朝鮮大学	1996年/なし	0	4	4
23	東亞大学	1984年/なし	0	4	4
24	慶星大学	1993年/なし	0	3	3

25	淑明女子大学	1999年／2008年	0	3	3
26	慶南大学	1996年／なし	0	2	2
27	高麗大学（学部・修士に舞踊学科なし）	1972年／なし	0	2	2
28	水原大学	年度不明／なし	0	2	2
29	東國大学	2003年／なし	0	2	2
30	韓国教員大学	1993年／なし	0	2	2
31	又石大学	1999年／なし	0	1	1
32	蔚山大学	2005年／なし	0	1	1
33	カトリック大学（学部, 修士に体育・舞踊学科なし）	なし／なし	1	0	1
34	慶北大学	1987／なし	1	0	1
35	順天郷大学	2003年／なし	0	1	1
36	ソウル女子大学（学部, 修士に舞踊学科なし）	詳細不明／なし	0	1	1
37	誠信女子大学	2006年／なし	1	0	1
38	全北大学	年度不明／なし	0	1	1
39	大丘大学	1999年／なし	0	1	1
40	大丘カトリック大学	2000年／なし	0	1	1
41	忠南大学	2000年／なし	0	1	1
42	木浦大学	2000年／なし	0	1	1
計	42大学		61件	213件	274件

※ 体育学・舞踊学の博士課程開設年度は、各大学のホームページの沿革から、また、沿革が掲載されていない大学には直接問い合わせる方法で調べた。しかしながら、返答がなかった大学についてはやむを得ず「年度不明」あるいは「詳細不明」と記入している。

3. 研究分野別分類

分野の選定については、韓国学術振興財団の研究分野分類表の14分野「舞踊哲学」、「舞踊美学」、「舞踊史（伝記を含む）」、「舞踊批評」、「舞踊人類学」、「舞踊譜」、「動作分析」、「舞踊教育」、「舞踊治療（ダンス・セラピー）」、「舞踊心理学」、「舞踊社会学」、「舞踊機能学」、「振付」、「その他舞踊」に私が必要と考える3分野「舞台美術」、「舞踊マネジメント」、「作品論」を加え17分野とし、分類を行った（表3参照）。

分類の結果、上位3分野「舞踊心理学」（17.2%）、「舞踊教育」（15.7%）、「舞踊機能学」（14.2%）で全体の半数近くを占めている（47.1%）ことが分かった。

さらに、前期と後期の比較においては「舞踊教育」、「舞踊機能学」、「舞踊史（伝記を含む）」、「舞踊治療」、「動作分析」、「舞台芸術」、「舞踊美学」、「振付」が後期の方が割合を減らしており、特に「舞踊史（伝記を含む）」は21.3%から5.2%へと、「舞

踊教育」は23%から13.6%へと急減している。その反面、「舞踊心理学」が9.8%から19.2%、「作品論」が0%から9.9%、「舞踊マネジメント」が1.6%から8.9%、「舞踊哲学」は0%から6.1%と後期の方が増えていることが分かる。

そして表では分からないが、「舞踊心理学」、「舞踊教育」、「舞踊マネジメント」、「舞踊治療」（4分野の合計47.5%）の研究方法を調べたところ、文献資料を用いない方法論が過半数に及んでいた。具体的には①対象集団と比較集団（例えば、舞踊経験集団と舞踊とは一切関わりのない集団）に対し一定期間舞踊プログラムを実行させる、②アンケート調査を行う、③面接調査を行う、④それらのいずれかの方法により統計結果を求めるといような具合である。これに測定による実験研究の「舞踊機能学」を入れると全体研究の61.7%に達し、言うなれば、短時間で確実に結果を得られる方法論に偏った傾向が見受けられる。

【表 3】韓国舞踊博士論文の研究分野別分類

(崔柄珠 作成)

順	研究分野別分類	86年-99年 件 (%)	00年-07年 件 (%)	総件数 件 (%)
1	舞踊心理学	6 (9.8%)	41 (19.2%)	47 (17.2%)
2	舞踊教育	14 (23%)	29 (13.6%)	43 (15.7%)
3	舞踊機能学	11 (18%)	28 (13.1%)	39 (14.2%)
4	舞踊史 (伝記を含む)	13 (21.3%)	12 (5.6%)	25 (9.1%)
5	作品論	0 (0%)	21 (9.9%)	21 (7.7%)
6	舞踊マネジメント	1 (1.6%)	19 (8.9%)	20 (7.3%)
7	舞踊治療 (ダンス・セラピー)	5 (8.2%)	15 (7%)	20 (7.3%)
8	舞踊社会学	2 (3.3%)	12 (5.6%)	14 (5.1%)
9	舞踊哲学	0 (0%)	13 (6.1%)	13 (4.7%)
10	動作分析	3 (4.9%)	5 (2.3%)	8 (3%)
11	その他舞踊	1 (1.6%)	4 (1.9%)	5 (1.8%)
12	舞台美術	2 (3.3%)	2 (0.9%)	4 (1.5%)
13	舞踊美学	1 (1.6%)	3 (1.4%)	4 (1.5%)
14	舞踊批評	0 (0%)	4 (1.9%)	4 (1.5%)
15	舞踊譜	0 (0%)	3 (1.4%)	3 (1.1%)
16	振付	2 (3.3%)	1 (0.5%)	3 (1.1%)
17	舞踊人類学	0 (0%)	1 (0.5%)	1 (0.4%)
計	17	61 (99.9%)	213 (99.8%)	274 (100.2%)

まとめ

韓国の舞踊博士論文274件を対象とし、年代別・大学別・研究分野別という3つの視点から分類した結果以下のことが判明した。

- ①前期(1986-1999)が61件に対し後期(2000-2007)は213件と急増している。
- ②急増の主要因は舞踊学科博士課程の開設である。
- ③短時間で確実に結果を得られる方法論に偏った傾向が見受けられる。

これらの結果を踏まえ私なりに考察したその背景は以下の通りである。

- (1) 日本が就職難に陥った「失われた10年」の間に、景気回復を待つ意味でも他者よりより優位に立つためにも修士課程へ進む学生が増えたように、韓国においても1997年の経済危機以降大学院へ進学する学生が増大した。が、舞踊を専攻する者にとっては一般企業への就職ではなく大学教員を目指すものが多いため修士に留まらず博士課程まで進む必要性に迫られた。このニーズに沿う形で多くの大学が博士課程を開設するあるいは今後開設しようとする動きへと繋がった。このことが博士論文の急増へと、そして今後さらに増えるであろうという要因の一つ

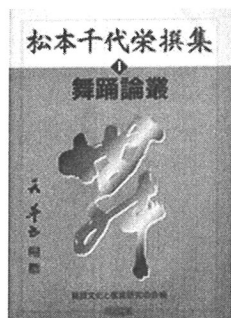
であると考えられる。

- (2) 2000年以降舞踊学科に博士課程ができたものの、多くの舞踊博士論文は体育学科所属で提出されているので必然的に舞踊学が体育学の影響を受けざるを得ない状況が続いている。したがって舞踊実習やアンケート調査、実験研究が文献資料を扱う研究を上回るのは当然の成り行きであり、美学、哲学、歴史、芸術などの観点から取り組む研究論文が少ないことは残念なことであると考えられる。
- (3) 論文全体ではなく主に「論文概要」と「研究方法」の部分を資料として用いたため断言はできないが、興味を引く論文はさほど多くなかった。つまり、量的な増加に対し質が追い付いておらず、またこれまでとは異なる方向で舞踊博士論文を指導できる理論研究者の不在が懸念される。これらを克服するためには時間はかかるかもしれないが、私としては教育システムと舞踊研究に対する価値観の見直しを求めて止まない。

文献紹介

「松本千代栄撰集」 全5巻

田園調布学園大学 安村 清美



- 第1巻 舞踊論叢
- 第2巻 人間発達と表現
一幼・小期
- 第3巻 人間発達と
舞踊創作
- 第4巻 舞踊発想と音楽
- 第5巻 舞踊教育の開拓

『松本千代栄撰集』全5巻が、本年1月、松本先生の米寿と時を同じくして明治図書出版より刊行された。この撰集5巻は、松本先生が奈良女子高等師範附属小学校で教職についた昭和22年から現在まで、60余年にわたって執筆し、専門誌などに収められた論考や記事をはじめとして、音楽や映像の制作を含む膨大な業績の中から選んだもので、その執筆内容によって、各巻タイトルを冠し、その内容ごとにさらに細かく

分類されている。

まず、第1巻『舞踊論叢』は、大学に奉職以来の論考の中で、松本先生の思考の核となると考えられる「舞踊文化と教育を繋ぐ」意味について、舞踊そのものの現象に関する研究と教育実践研究を通して論じられている。「身体表現を読む」「身体で表現する」や、最終講義「ひと流れの動きに生命ありと」に代表される論考は、これらの関連性を明確に位置づけた長年の研究のひとつの帰結であろう。また、理想を描きつつ現実を見極める教育者としての姿勢について書かれた「「私自身」を問う」「道」をもとめる」などは、人としての生き方そのものに言及して示唆に富むものである。

松本先生は、発達を見通した舞踊教育の理念と方法を追究し牽引してきたことは自明であるが、第2巻『人間発達と表現』には、特に、幼・小期に関するものをまとめた。『学習研究』誌上に掲載された「身体をとらえつつ身体をのりこえていくもの」「表現の命脈」などの論考に代表されるような、初心の小学校教諭として、かつ、伸び行く子どもの姿に瞠目しつつ、目指す舞踊教育の姿を探求し試行錯誤する、松本先生の原点とでも言える論考は今読んででも新鮮さを失っていない。また、常に深化し続ける指導法研究を幼児期に反映させたものとして、『幼児の指導』に2年間にわたって連載された「表現あそび」シリーズも他に類を見ないものである。

第3巻『人間発達と舞踊創作』には、松本先生が実践と研究を重ねて構築した、創造的芸術経験としてのダンス学習指導に関する理論と方法のうち、特に中・高生対象の論考について、時代を追ってみるができる。「創作指導覚書」シリーズ、「舞踊表現の構造と要素化」以降の「課題学習」につながる論考は、松本先生が打ち立てた、舞踊教育理論の骨格をなすものと考えられる。このような中、常に、研究者としては、研究成果を教育の場にという姿勢を持ち、文部省の様々な委員や講習会講師を通じた公的な立場の傍ら、清里研究会などの研究会を長年継続し、現場での実践を通して、研究成果の実証を図り、一方で、現場の教員の再教育にも貢献していることがわかる。

第4巻『舞踊発想と音楽』には、舞踊創作に資する音楽をという考えから創案された数多くの楽曲の解説がまとめられている。舞踊と音楽という、切り離しがたい関係性を持つ両者に対する造詣の深さが、この業績を可能にしたといえよう。さらに、年来の研究成果をその都度、楽曲に反映させることで教育現場の学習指導を支えたことも大きな業績である。また、この巻には、舞踊家や学生の公演活動に贈った“ことば”が収められている。言語をもって舞踊作品と舞踊創作者、ダンサーを繋ぎ、より輝きを放つ作品となったことは想像に難くない。松本先生の教育現場を越えての活躍—舞踊に携わる多くの人々との交流や、舞踊の近接領域の価値への愛着—が想起できる巻である。

第5巻『舞踊教育の開拓』は、まさに松本先生が“切り開いてきた”歴史を読み取ることができる。それは、体育の中への創造的芸術経験としての舞踊の位置づけであり、学としての舞踊学確立のための講座・学科の新設であり、日本女子体育連盟の基盤の充実や国際会議の開催やそこでの活躍である。加えて『全日本高校・大学ダンスフェスティバル—神戸』では、学校におけるダンス活動を、全国レベルで学外に発信した意味は大きい。最後に収めた、国内外において、松本先生およびその業績について論じられた論考は、長年のこの分野に対する貢献の証左でもある。高い評価は、舞踊教育に捧げた人生と人間性への賛辞と受け止めることができる。

この撰集からうかがい知ることのできる松本先生は、ただ舞踊研究者・教育者にとどまらず、舞踊文化の本質と教育の関連性から、大きく国の教育あるいは人間の教育を考え、信念と使命感を持って組織を作り、人を動かし、しかし自らも決して休むことなく歩み続けてきたといえる。膨大な業績と、その影に隠された人知れぬ努力、そして、様々な布石は、舞踊に携わる我々にとって、その一つ一つがそれぞれの道標となるに違いない。

(編集：舞踊文化と教育研究会)